

アフリカ音楽分析

ジャズのルーツとしてのポリリズムと音律

坪口 昌恭

An Analysis of African Music: Polyrhythm and Tonal System as Roots of Jazz

TSUBOGUCHI Masayasu

Abstract

Chapter1 is the analysis of the uniqueness of polyrhythm in African Native music based on the audio and visual resources such as CDs and VTRs. Chapter2 is the analysis of the tendency and difference in the tonal system in African music, with the comparison to "equal temperament". Based on these analysis and resources, the generally accepted opinion that African music is the origin of jazz and blues, would be proved in the latter part of regime.

Key Word: Polyrhythm, Tonal System, Equal Temperament, Dorian Mode, Blues

[要約]

第一章では、アフリカ土着音楽において特徴的な要素であるポリリズムについて、CD や VTR 等の音資料から採集・採譜し、その特徴を分析する。第二章では、アフリカ音楽に特有の音律について、音資料から聴取し十二平均律とのずれや傾向を調べる。それらにより、ジャズやブルースのルーツがアフリカ音楽にあるという通説の音楽的裏付けをおこなう。

キーワード：ポリリズム、音律、十二平均律、ドリアンモード、ブルース

はじめに

ジャズとアフリカ、そこに密接な関係があるということはもはや通説である。南北戦争終了後、奴隷解放によりアフリカ系黒人が白人の残した西洋楽器を手にし、そこからブルースやニューオーリンズ・ジャズが生まれたと言われる。また、20世紀のモダンジャズ界をリードしてきたマイルス・デイビス、ジョン・コルトレンをはじめ、ウェザーリポート、ハービー・ハンコックらは、ルーツに恩返しをするかのようにアフリカン・テイストをふんだんに取り入れてきた。筆者自身、ジャズを志してから20年以上が経つが、アフリカ音楽からは必然的にかなりのインスピレーションを得、自己の作品にもふんだんに取り入れている。

特にポリリズムは、アフリカ音楽とジャズに共通の最も重要な特徴であり、その“だまし絵”的なアプローチは、ダンス・ミュージックとしての本質を失わずにアートの領域へと高めることに不可欠である。そこでまず第一章では、前研究に引き続きアフリカ諸国のポリリズム・アンサンブルについて分析した結果をまとめる。

そしてもうひとつ、アフリカ音楽における独特の音律（音階上のピッチ）も以前より大きな関心事であった。我々十二平均律に慣れ親しんだ者にとっては、なかなかまねできるものではないが、あの素朴で親しみを感じる音律には何か法則があり、ひょっとするとブルースはここから派生したのではないかと思わせる共通性すら感じる。第二章では、アフリカ音楽に見られる音律に焦点を当て、それがジャズやブルースのルーツとなりえたかを検証する。

1. アフリカ土着音楽におけるポリリズム分析 vol.2

1-1. アフリカ諸国の土着音楽におけるポリリズム（3カ国7種類）

アフリカ音楽に顕著な特徴として見られる「ポリリズム」。尚美学園短期大学研究紀要第10号（1995年）に発表した「ポリリズム研究」＜アフリカ音楽におけるポリリズム分析＞の中の、アフリカ諸国の土着音楽におけるポリリズム（8ヶ国12種類）の続編として、新たに採譜・分析したものをここに掲載する。今回は、カメルーン4種、ギニア2種、ガボン



アフリカの国々（色付きは今回までにポリリズムを採譜した国）

1種の7曲(7パターン)を解説する。

前回の研究結果より既に明らかなアフリカン・ポリリズムの特徴として、一見8分や16分音符の譜割りに感じられるが、実は1拍を3連符で分割し裏拍にアクセントがあるようなものが多い。これを“3連オフビートの様式”と名付け、解説中でもたびたび使用する。そのように、複数の拍子に感じられるからこそポリリズムであるわけだが、その部分を明らかにするため、基本的な譜割りとは別の拍子に感じられる部分ごとに“ ”マークをつけることにする。

尚、筆者のホームページに“ AfroPoly ”というサイトがあり、同研究の内容をマルチメディア化し(Shockwave プラグイン使用) 楽譜と共に音が聞けるようにしてあるので、是非そちらもご参照願いたい。(http://www.jah.ne.jp/enterdir/jah_radio/afropoly/index.html)

#1 . CAMEROON-1

@BALAFONS AND AFRICAN DRUMS (PLAYASOUND-PS 65034) より

Track8 : Bamileke Fete [譜例 1]

Part-----Balafon / Maracas / 太鼓

♩ = 206

CAMEROON : Bamileke Fete

The musical score is written in 4/4 time with a tempo of 206 BPM. It consists of three staves: Balafon (top), Maracas (middle), and Small Drum (bottom). The Balafon part features a melody of quarter notes with triplet markings over groups of three notes. The Maracas part consists of a steady eighth-note pattern with triplet markings. The Small Drum part has a simple eighth-note pattern. The score is divided into four measures, each containing a triplet of notes.

4分3連、8分3連、8分と、オーソドックスなポリリズムの要素で成り立っているが、下2パートが裏から出てくるのでずれているように聴こえる、いわば「ズレリズム」と呼びたくなるタイプである。ズレやタメも継続すればグルーブ(リズムに合わせて体が動き出すようなフィーリング)として感じられる。太鼓の裏打ちを頭で感じればよいのかもしれないが、あえてパラフォンのフレーズを基準にカウントした。この後ろでは時々男声のかけ声がかかったり、がやがや騒いでいる。

#2 . CAMEROON-2

@BALAFONS AND AFRICAN DRUMS (PLAYASOUND-PS 65034) より

Track15 : Midnight Mass Extract [譜例 2]

Part-----4 つの Balafon / Maracas / 大小 2 つの太鼓

CAMEROON : Midnight Mass Extract

The musical score is arranged in four systems. The first system includes a tempo marking of ♩ = 142. The first staff is for '<4 Balafons>' and contains a melodic line with triplets. The second staff is for '<Maracas>' and shows a rhythmic pattern with 'x' marks. The third staff is for '<Drums>' and features a rhythmic pattern with triplets. The second system continues these parts. The third system shows the Balafons part with a double bar line and repeat signs. The fourth system concludes the piece with a double bar line and repeat signs.

一聴した段階では5拍子かと思うが、それでは字足らずである。正確には9拍あり「カカカン・カンカカン」ではなく「カカカ・ンカン・カカン」の3拍子と考えた方が理にかなっている。つまり5拍子の字足らずと3拍子のどちらにもとれるポリリズムということ。実際はバラフォンの3拍目が矢印のように譜面より前にあり「カカカン・カンカンカン」というニュアンスである。太鼓は素手で叩いているらしくソフトな鳴り音。4つのBalafonということらしいが、4音を4人で分担して叩いているのか、多少の重複があるのかは定かではない。

#3 . CAMEROON-3

@BALAFONS AND AFRICAN DRUMS (PLAYASOUND-PS 65034) より

Track17 : Dance in Honour of the Lamido-(a),(b) [譜例 3a,b]

(a)Part-----Balafon / Maracas / Scrapers / 大小2つの太鼓

♩=158 CAMEROON : Dance in Honour of the Lamido-(a)

The score is for a 4/4 piece in 2/4 time signature. It consists of four staves: Balafon (treble clef), Maracas (percussion), Scrapers (treble clef), and Drums (percussion). The Balafon part features a repeating melodic phrase with triplet markings. The Maracas part consists of a steady rhythmic pattern of 'x' marks. The Scrapers part has a rhythmic pattern with triplet markings. The Drums part shows a complex rhythmic pattern with various note values and rests.

バラフォンは大きな3拍子フレーズ、スクラッパーは3連系の4拍子、太鼓は16系の4拍子と、美しいバランスのポリである。バラフォンは「カカコン・カカッコ・カカコン」と3拍子に聴こえるが、アフリカに多い“3連オフビートの様式”により「カカコ・ンカカ・ンココ・カコン」と4つに感じることができれば、アフリカのグループに慣れてきたと言える。これが3分ほど続いた後、次の(b)パターンとなる。

(b)Part-----Voice / Scrapers / Maracas / Double-bells / 太鼓

♩=172 CAMEROON : Dance in Honour of the Lamido-(b)

The score is for a 4/4 piece in 2/4 time signature. It consists of five staves: Voice (treble clef), Scrapers (Guiro?) (percussion), Maracas (percussion), Double-bells (treble clef), and Small Drum (percussion). The Voice part has a simple melodic line. The Scrapers part features a rhythmic pattern with 3 and 5 note groupings. The Maracas part has a steady rhythmic pattern. The Double-bells part has a rhythmic pattern with 3 and 5 note groupings. The Small Drum part has a rhythmic pattern with various note values and rests.

これで一つの曲とは思えないほど(a)とは全く違った雰囲気である。譜面で見ると5連符があったり奇抜な感じがするが、サウンド的には自然に訛ったのどかなパターンである。このような場合、「ポリリズム = 訛りの産物」であると考えた方が良さそうだ。実際はこれの他

に“ドンドコンドコ”といった太鼓が聴こえている。

#4 . GUENIA

@BALAFONS AND AFRICAN DRUMS (PLAYASOUND-PS 65034) より

Track9 : Fete Dances-(a),(b) [譜例 4a,b]

(a)Part-----笛 / Shaker / 太鼓

♩=152 GUINEA : Fete Dances-(a)

The score for GUINEA : Fete Dances-(a) is in 4/4 time with a tempo of 152. It features three parts: <Flute>, <Shaker>, and <Big Drum>. The flute part consists of eighth notes with accents. The shaker part is a rhythmic pattern of eighth notes with triplet markings. The big drum part is a simple eighth-note pattern.

3連と8分による初歩的なポリリズムである。シェイカーについては、驚くべきことに(a)での3連符と次の(b)の5連符とで、一つ一つのタイムは同じである。

(b)Part-----Balafon1 / Balafon2 / Balafon3 / Shaker / 大小2つの太鼓

♩=174 GUINEA : Fete Dances-(b)

The score for GUINEA : Fete Dances-(b) is in 4/4 time with a tempo of 174. It features five parts: <Balafon-1>, <Balafon-2>, <Balafon-3>, <Shaker>, and <TomTom>. The balafon parts consist of eighth notes with triplet markings. The shaker part features a complex rhythmic pattern with 5-measure groupings. The tom-tom part is a rhythmic pattern of eighth notes with triplet markings.

The image shows a musical score for a piece in 3/4 time, featuring three staves. The top staff has a melody with eighth notes and triplets. The middle staff has a bass line with eighth notes and triplets. The bottom staff has a bass line with quarter notes. The key signature is three sharps (F#, C#, G#).

明るくかわいらしいパラフォンの醍醐味が味わえる曲。このまま現代のバンド形態で演奏しても十分通用するようなしっかりとしたアンサンブルである。CDのクレジットには2パラフォンとあるので、パラフォン1を一人が、パラフォン2と3をもう一人が叩いていると思われる。

録音の状態からすると、(a)と(b)は離れた場所で演奏されており、録音者が(a)地点から(b)地点に移ってきているようだ。但しシェイカーのサウンドは同じで継続している(アクセントの位置は変わるが)。それが曲によって3連符で組み込まれたり5連符で組み込まれたりするとは、なんとハイセンスなことであろうか。

#5 . GABON

@MUSIC OF PYGMIES BIBAYAK (OCORA C 559 053) よリ

Track5 : Voice and Sanza [譜例 5]

Part-----Voice / Kalimba / Claps1 / Claps2

♩=117

GABON : Voice and Sanza

<Voice>

<Kalimba>

<Claps-1>

<Claps-2>

カリンバ(サンザ)の弾き語りとも言える、もの哀しげな曲。ジンバブエほど洗練されていないが、ぎこちなさがかえって感動的である。カリンバを「コン・コカ・コン・コン・コン・コカ」とれば6拍子だが、「3連オフビートの様式」により「コンコ・カコン・コンコ・ンコカ」と感じれば4拍子、という具合に、のんびりとしたテンポの中でもしっかりとしたポリリズムを醸し出している。

1-2. 補足訂正

前回「ポリリズム研究」(1995年)を公表した後、さらに音源収集・分析を続けていく中で、前研究論文で採譜した曲の中に譜割上の間違いが発見されたので、2曲ほどここに訂正させていただきたい。これらは当初、アフリカ音楽にふさわしくない譜割りで捉えてしまっていたが、以後、アフリカ音楽に造詣の深い演奏家たちと接したり、自己の音楽にアフリカの要素を積極的に取り込むことにより耳が肥え、的確な判断が出来るようになった結果であることをご理解願いたい。

#6 . BURKINA-FASO

@The OCORA BOX AFRICA 編 (OCORA C560065) より

Track1 : ビレ : ロビ族の祝い歌 [譜例 6]

Part-----Voice と Balafon / Log Drum / Castanet

♩=130

BURKINA-FASO : 「ビレ : ロビ族の祝い歌」

The image shows a musical score for a piece in 6/4 time. It consists of two systems, each with three staves. The top staff is in treble clef, the middle in treble clef, and the bottom in bass clef. The music features a complex rhythmic pattern with many triplets and eighth notes. The key signature has one sharp (F#).

当初、8分系の6/4拍子で楽譜化していたが、これまでの分析結果から“3連オフビートの様式”で書き直したところ、アフリカン・フィーリングにふさわしく、ボーカルパートも歌いやすくなった。ちなみに、ロビ族の演奏家は「(同じ調律で)一緒に木琴を奏でたい者は同じ楽器作りから楽器を手に入れる」と言うそうだ。それほど調律というものは同じ文化圏の中ですら差異があり、パーソナルなものであることが伺われる。

#7 . GUINEA

@MUSIQUE DU MONDE : LES PERCUSSIONS DE GUINEE No.2 (BUDA Records 92586-2) より

Track1 : DUNUNBO [譜例 7]

Part-----金属製ベル / Djembe (Solo) / Dounoun

♩ = 170

GUNIEA : Dununbo

The image shows a musical score for 'Dununbo' in 4/4 time. It consists of three staves. The top staff is for the Bell, the middle for the Djembe, and the bottom for the Dounoun. The music features a complex rhythmic pattern with many triplets and eighth notes. The key signature has one sharp (F#). There are arrows pointing to specific notes in the Djembe and Dounoun parts.

当初、16分系の3/4拍子で解釈し、矢印音付近を1拍目と捉えて楽譜化していたが、ベル

の常套パターンが明らかになったことにより、今回の解釈が正しいことが判明した。このベルのパターンは、マイルス・デイビスの1973年のライブアルバム「IN CONCERT」の冒頭部分に、そっくり引用されている。

1-3. まとめ

アフリカン・ポリリズム全体を通して見られる特徴が“3連オフビートの様式”であることは、今回の分析結果からもさらに確固たるものとなった。しかしながら、CAMEROON-1やGUINEA(b)のように、たまたま演奏が乱れてずれてしまったのではないかと、思わせるくらい特異なアンサンブルも見つけられた。それが様式的なものか偶発的なものかの判断は現段階ではできない。ただ、筆者自身も、新しいジャズの方法論として、整合性のないポリリズム/ポリテンポの演奏を模索・実践しており、そのおもしろさ・新鮮さをひしひしと体感しているところである。そのようなことがアフリカではすでに伝統音楽として受け継がれているのだとすると、リズムに対するその先進性に畏敬の念を抱くばかりである。

ところで、アフリカン・ポリリズムに顕著に見られる“3連オフビートの様式”は（一見テイストが異なるので気づきづらいが）まさにジャズに応用されているリズムそのものである。ジャズに頻出するスイング・ビート（4ビート）は、4つに数えられると同時に、6つにも感じるべきである（バリー・ハリス氏の指導でも語られる）。つまり2拍3連のフィーリングを持つことで、リズムに柔軟性を持ってアプローチできるのである。そしてそれこそ、ジャズのルーツがアフリカにあるという大きな証拠であるという。ジャズを学ぶ上でリズムに対する柔軟性を向上させるためにも、アフリカのポリリズムを体得することは効果的である。

2. アフリカの音律とモード、ブルースについての考察

“ブルースやジャズはアフリカ音楽にルーツを持つ”という説の証拠の一つとして、前章でのポリリズム分析から、ジャズのスイング・ビートがアフリカの“3連オフビートの様式”に基づいていることは実証済みである。では旋律的にはどうか。実際アフリカの土着音楽を聞き流しただけでは、ブルースやジャズのルーツを感じるどころか、むしろ日本の民謡に近いくらいの印象を持つにすぎないが、よく聞き込むことにより独特な旋律と西洋音楽にはない音律が耳に残る。それは土着音楽だけでなく、サリフ・ケイタやユッサー・ンドゥールを始めとする現代のアフリカン・ポップ・シンガーにおいても同様である。筆者はここに何か秘密があるのではないかと目を付けた。

1995年に発表したものと今回のポリリズム分析を進める過程で、印象的な旋律や音律を持つものが見つかったので、そのピッチを詳しく調べてみた。まだ十分な資料収集とは言い難いが、予想通り興味深い結果が得られたので、ここに紹介したいと思う。

2-1. 十二平均律

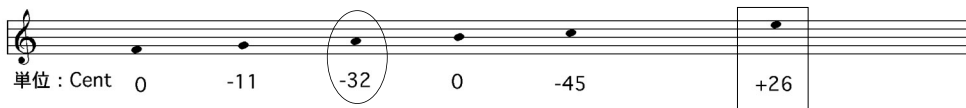
分析に先立って、我々が当たり前に感じている十二平均律 (Temperament) というものを認識しておく。元々自然現象的に振動数の比が 1 : 2 のものを 1 オクターブ、2 : 3 のものを 5 度音程、3 : 4 のものを 4 度音程と定めた。この関係を利用してその他の音程も算出していくことで純正律音階 (Pure Temperament) ができる。ところがこれでは全く転調のない曲は美しいが、わずかな転調をするたびに不協和が際だってしまう。それを打開するために作られたのが十二平均律である。その名の通り 1 オクターブを数学的にそれぞれ $^{12}\sqrt{2}$ という 12 の均等な音程に分割した音律であり、転調をしても差が起らない音律として普及した。ジャズ理論においても十二平均律が大前提となっている。今回は十二平均律とアフリカ各国の音律を比較することで、ズレの特徴を見つけだしていくことにする。

2-2. アフリカ諸国の土着音楽に見られる音律分析

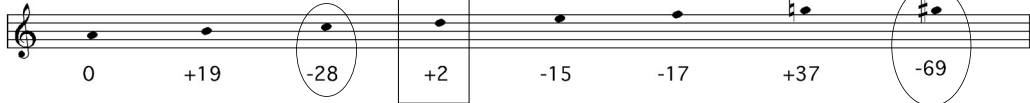
さて分析の手順だが、本研究でとりあげたアフリカ諸国の中から、器楽パートなど比較的ピッチの一定した旋律を抜粋し、そのメロディのトータル (中心音 = トニック) を定めた上で、他の音程のピッチのズレを調べてゆく。アフリカ土着音楽の CD 等をコンピュータに取り込み、波形編集ソフトでループさせて、MIDI 音源と比較することでピッチを割り出し、cent 数で表記してゆく (十二平均律の半音は 100cent と定められている)。とにかくこの作業は耳に頼るしかなく、トニックが希薄であったりスケールの全音が出そろっていなかったりオクターブですら合っていなかったりと、困難を極めたが、最終的に 9 曲 13 パート (前研究「ポリリズム研究」からの楽曲含む) の音律のずれを聞き取っていった。なお、基になるスケールのトニック (第 1 音) は ± 0 cent とする [譜例 8]

[譜例 8]

CONGO-2 : BAVUDI BEKA YULAMANGA <F# Major> Guitar (Laute)



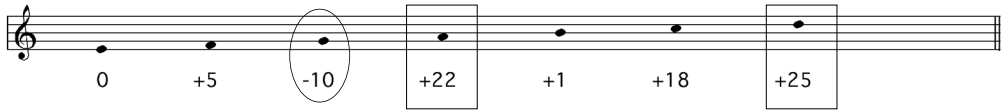
ZIMBABWE-1 : ショナ族のムビラ「大声で言うだろう」 <A Major> Whistle



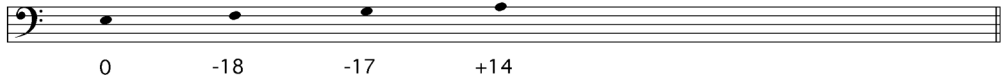
ZIMBABWE-1 : ショナ族のムビラ「大声で言うだろう」 <A Major> Mbira



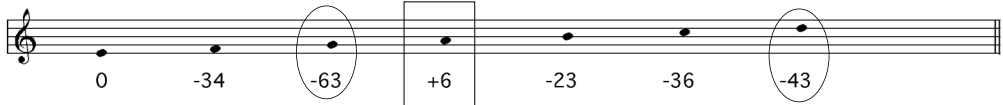
ZIMBABWE-2 : ショナ族のムビラ「仮小屋」 <E Major> Mbira1



ZIMBABWE-2 : ショナ族のムビラ「仮小屋」 <E Major> Mbira2



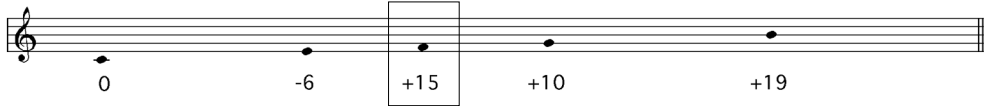
ZIMBABWE-2 : ショナ族のムビラ「仮小屋」 <E Major> Mbira3



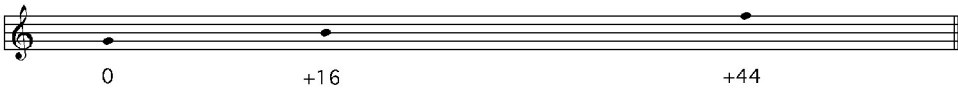
ZIMBABWE-2 : ショナ族のムビラ「仮小屋」 <E Major> Mbira4



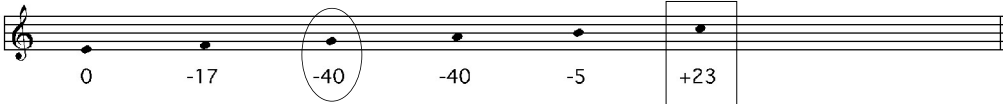
BURKINA-FASO : ビレ : ロビ族の祝い歌 <C# minor> Balafon



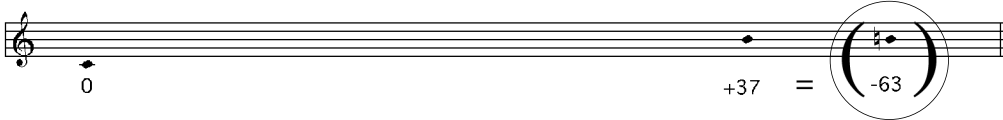
CAMEROON-1 : Bamileke Fete <G# minor> Balafon



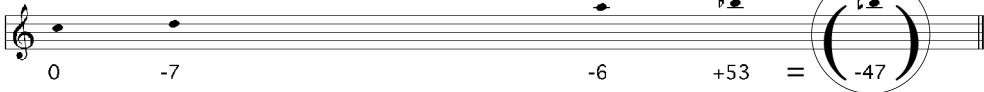
CAMEROON-2 : Midnight Mass Extract <E b Major> Balafon



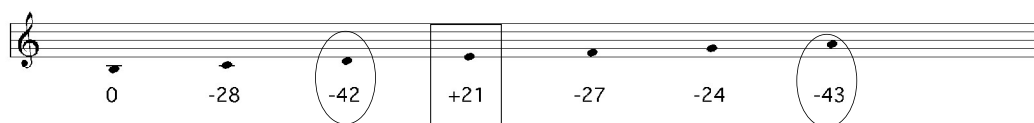
CAMEROON-3 : Dance in Honour of the lamido(a) <C minor> Balafon



GUNEA2 : Fete Dance-a <C Major> Flute



GUNEA2 : Fete Dance-b <B Major> Balafon 1



これらより明らかなように、十二平均律からは随分とずれたピッチで演奏されていることがわかる（アフリカの人々にとっては平均律の方がずれて聞こえるのであろうが）。これらは、決して気候が暑くてチューニングが狂ってしまったわけではなく、その地域の伝統的な音律に基づいた結果だと考えられる。特筆すべきは、メジャーの場合“ ”印で囲ったように3rdのピッチが平均律よりも低くなっていることである。マイナーの場合は3rdと7thがやや高めである。一方“ ”印で囲ったように4thはやや高めである。7thは高いものが4種（“ ”印）、低いものが6種（“ ”印）あるが、低いものは-50cent近く下がっていて、これは大きな特徴だと思われる（7thが高いものに関して、CONGO-2はギターがF#メジャー、ボーカルがBメジャーというポリ・キーであるため、E音とF音の不協が甚だしい。ZIMBABWEのムピラに至っては1オクターブのチューニングがことごとく違っていて、ピッチの確定には困難を極めた。それらによる聴き取り誤差もあるであろう）。楽曲的にはメジャーとマイナーの差ははっきり聞き取れるが、音律上ではメジャーとマイナーが歩み寄っていることがわかる。そしてそれは半音より広く全音より狭い音程を含む7音等間隔音階への傾向が強いということである。そこで後の検証のために、理論的7音等間隔音階と十二平均律とのずれを算出しておく。

十二平均律における半音は100centという単位で表せるので、1オクターブは1200centということになる。基準をCとすると、そこからの半音階のcent数は、

<十二平均律でのcent数>

C : 0	E : 400	G # : 800
C # : 100	F : 500	A : 900
D : 200	F # : 600	B : 1000
E : 300	G : 700	B : 1100

十二平均律は言い換えれば12音等間隔音階と言える。

次に、この1オクターブを7音等間隔（言い換えれば七平均律）に分けてみる。1200cent ÷ 7 = 171.4... cent であるから、最初の音からcent数を加算すると、

<理論的7音等間隔音階のcent数>（小数点以下四捨五入）

- 第1音：0
- 第2音：171
- 第3音：343
- 第4音：514
- 第5音：686
- 第6音：857
- 第7音：1029

7音等間隔音階と十二平均律を比較し、まとめると、

<十二平均律に対する7音等間隔音階のピッチ>

- 第1音：Cに対して0 cent
- 第2音：Dに対して-29 cent
- 第3音：E に対して+43 cent (E に対して-57 cent)
- 第4音：F に対して+14 cent
- 第5音：G に対して-14 cent
- 第6音：A に対して-43 cent
- 第7音：B に対して+29 cent (B に対して-71 cent)

これより、7音等間隔音階はメジャースケールよりもドリアン・モード (CDE FGAB) に最も近く、その次に近いのがミクソリディアン・モード (CDEFGAB) であることが一目瞭然である。

ではここで、各国の実際の音律とその平均値、そしてたった今出した7音等間隔音階とを比較するために、一覧表を作成してみる。なお、今回分析した9曲中、メジャースケールと解釈できるものが6曲10パート、マイナースケールと解釈できるものが3曲あった(ただしマイナー系ではII音とIV音が表れなかったため、メジャーとの違いはIII音とVII音だけである)。従って、メジャー系とマイナー系に分けて表記する[表1]

この表から、7音等間隔音階の理論値と実際の平均値の傾向は、メジャーに関してはかなり近いことが読みとれる。マイナーに関しては、資料が少なすぎるため断定できないが、III音やVII音が高いという傾向は確認できる(試しに5音等間隔音階のcent数も算出し比較してみたが、傾向は一致しなかった)。従って、今回調べたアフリカの音律はおおむね7音等間隔音階の傾向にあると考えて問題ない。先程も述べたように、アフリカ音律における第3音はメジャー3rdとマイナー3rdの中間、第4音は高め、第7音はメジャー7thと7thの中間ぐらいのピッチである。言い換えると、アフリカの音律7音等間隔音階は「ドリアンよりもE音、F音、B音はやや高い」ということ。これは、まさにブルーノートと呼ばれる3音であり、ブルース・スケールの特徴そのものである。つまり、ドリアンとブルース・スケールはアフリカの音律を無理矢理十二平均律で演奏しようとした場合の近似値であり、互いに近い存在だと言えよう[譜例9]

国名	Part	Key	I	II	III	IV	V	VI	VII
CONGO	Guitar	F# Major	0	-11	-32	0	-45		26
ZIMBABWE1	Whistle	A Major	0	19	-28	2	-15	-17	-69
	Mbira		0	-37	-31	7	-23	-21	-57
ZIMBABWE2	Mbira1	E Major	0	5	-10	22	1	18	25
	Mbira2		0	-18	-17	14			
	Mbira3		0	-34	-63	6	-23	-36	-43
	Mbira4		0	-3	-32	13	10		26
CAMEROON2	Balafon	E Major	0	-17	-40	-40	-5	23	
GUINEA2a	Flute	C Major	0	-7				-6	-47
GUINEA2b	Balafon	B Major	0	-28	-42	21	-27	-24	-43
Average			0.0	-13.1	-32.8	5.0	-15.9	-9.0	-22.8
7音等間隔音階理論値のMajorとの差			0	-29	-57	14	-14	-43	-71

国名	Part	Key	I	II	III	IV	V	VI	VII
BURKINA-FASO	Balafon	C# minor	0		-6	15	10		19
CAMEROON1	Balafon	G# minor	0		16				44
CAMEROON3	Balafon	C minor	0						37
Average			0.0		5.0	15.0	10.0		33.3
7音等間隔音階理論値のDorianとの差			0	-29	43	14	-14	-43	29

[表 1]

単位 : cent

C Dorian Mode

C Blues Scale (Full Note)

[譜例 9]

2-3 . 結論

アフリカの音律には7音等間隔音階に近い傾向が多く見られ、それは十二平均律におけるドリアンやブルース・スケールに極めて近い。

おわりに

文献によると、アフリカ音楽において、特に器楽の旋律は通常4音から7音の間にあると言われている(アフリカ音楽:クワベナ・ンケティア著による)。それどころか今回発表したものには2~3音だけの演奏も見られた。また5音等間隔音階というものも存在すると言

われている。そのように、旋律のパリエーションは多岐に渡っており、現段階ではとても網羅できているとはいえない。ただ、ブルース・スケールかどうかを判断する場合に特徴的な第3音や第7音とその前後を聞けば判断できるのと同様に、今回採譜したアフリカの旋律では、7音音階の構成音とみなすことに無理はなかったため、結果的にそうした。

以上の結果により「かつて白人が使い古した西洋楽器をアフリカ系黒人が手にして、5音等間隔や7音等間隔で演奏したいところ楽器は十二平均律になっていて、そこからなんとか自分の旋律を歌わそうとしてブルースが生まれた」という、アフリカの旋律がブルースやジャズのルーツであるという通説の裏付けになったのではないか。

最も多くのセールスを記録したと言われるジャズの名盤「カインド・オブ・ブルー」（1959年）で、マイルス・デイビスがビル・エバンスと組んでモード手法を提示したのだが、自伝の中に「アフリカのフィンガーピアノのようなニュアンスを出したかったが失敗に終わった」という話がある。失敗だったとしても歴史的名作が生まれたわけで不思議なものだが、この辺にも今回の分析結果のような「アフリカの旋律／音律～ドリアン、ブルース」といった共通のフィーリングが見え隠れしているような気がしてならない。

なお、この研究に当たっては、筆者のゼミ生であった鈴木弥生さん（尚美学園短期大学平成10年度卒）の努力と、ベース奏者水谷浩章氏、ドラムス／パーカッション奏者外山明氏の助言が大きかったので、ここに紹介しておく。

参考文献

- ・尚美学園短期大学研究紀要第10号 坪口昌恭著「ポリリズム研究」1996年
- ・尚美学園短期大学音楽情報学科 鈴木弥生卒業研究「アフリカ音楽の調律と音階」1998年
- ・クワベナ・ンケティア著、龍村あや子訳、「アフリカ音楽」、晶文社、1989年
- ・マイルス・デイビス／クインシー・トループ著、中山康樹訳、「マイルス・デイビス自叙伝」、JICC出版局、1990年
- ・各CD、VTRならびにライナーノーツ
 - # Afrique Centrale : Tambours Kongo (BUDA Records 92525-2)
 - # BALAFONS AND AFRICAN DRUMS (PLAYSOUND-PS 65034)
 - # ETHNIC SOUND SELECTION Vol.2 ELEGY 「哀歌」(WPC-14 OCD-3002)
 - # ETHNIC SOUND SELECTION Vol.8 CADENDIA 「律動」(WPC-16 OCD-3008)
 - # MUSIQUE DU MONDE : LES PERCUSSIONS DE GUINEE NO.2 (BUDA Records 92586-2)
 - # MUSIC OF PYGMIES BIBAYAK (OCORA C 559 053)
 - # The OCORA BOX AFRICA 編(OCORA C560065)
 - # 音と映像による世界民族音楽大系第18巻 アフリカ篇II チャド／カメルーン (VTMV-18)